

## 戦後生まれの義務

谷山中学校 二年 戌亥 琴美

八月十五日は、終戦の日だ。毎年この日がやってくる。私が終戦の日を知ったのは五歳ぐらいだった。教えてくれたのはテレビだったけれど、今考えてみれば、私は戦争のことについてほとんど未知だ。事実をいくらか知っているけれど、それはごく表面的なものだ。その奥の苦しきや無惨さは知らない。そして、もう知ることはできないかもしれない。それはとても恐ろしいことだと思う。

私は今、文化祭の劇の脚本製作に携わっている。私達二年生のテーマは「平和」だ。脚本を作るには戦争のことについて知らなければならぬ。そこで、図書室で資料を見てみた。当時の写真が何枚もあった。どれも衝撃的だったけれど、特に目に焼きついていて写真がある。それは、原爆で皮膚がただれ、むごい姿になっている人の写真だ。あまりに衝撃が大きくて、見た瞬間に目をつぶってしまった。一秒も見る事ができなかった。早く忘れてしまおうと必死だった。しかし、それと同時に、こんな過去があったことを知らない自分を恐いと思った。戦争の本当の恐ろしさを知らないことは、平和の本当の大切さを知らないことと同じだと思うからだ。平和の大切さを知らない人が増えたら、また同じ過ちをしようかもしれない。脚本製作を通して、そう考えるようになった。

今日本に、戦争の恐ろしさを知っている人はどのくらいいるのだろうか。終戦から七十五年が経った今は、私達の親が子供だった時よりもさぞかし少なくなっているのだろう。しかし、このままではいけないと思う。いつか、戦争の体験者が日本からいなくなってしまう日がくる。その時に日本が戦争のことを知らないままではいけない。戦争のことを知るためには、体験者の話を聞いて、残された遺物を見て想像しなければならぬと思う。自分達で体験してみる

わけにもいけないから、動くしかないと思う。私達には、戦争のことを後世に伝える義務がある。私達だけが「知らない」ですむことではないのだ。知らなければ、同じ道をたどってしまうかもしれないからだ。そうならないように、私は戦争のことをもっとたくさんの人に知るべきだと思う。戦争のことについて知り、もっと関心を持つ人が増えれば今の幸せを大切にすると増えると思う。不自由なく物が買えて、満身に食事ができる幸せを改めて感じる人が増えるのではないだろうか。そして、それが世界中に広がっていけば、もっと世界が平和になると思う。戦争をしても、メリットは一つもない。勝っても負けてもその国が「戦争をしてよかった」と思うはずはない。紛争だつてそうだと思う。考え方の違いで争うのなら、砲弾ではなく言葉を相手に届けることのほうがずっと価値がある。自分の利益だけを考えてはいけない。そう考える人が増えれば未来はもっと明るいものになるはずだと思う。

世界中の子供には、未来を担う権利がある。それは私達が大人になっても変わらない。未来をよりよい形にできるようにするのが、今の、そしてこれからの私達の使命だと思う。だから、新型コロナウイルスで世界が一変した今だからこそ、多くの人が「地球」について考えるべきではないだろうか。コロナと共にする生活は世界中で行われている。どの国も大変なのは同じなのに、「戦争だ」「紛争だ」などと言っている場合ではないと思う。地球は、一つ一つの国がバラバラに運営しているのではなく、パズルのように組み合わせられてできている。いつか世界が一つの個体として平和だと言えるようになるまで、私は戦争のことを忘れずに伝えていきたい。そして、この星に生まれてよかったと思えるようにしたい。